

「山高水清」

小山五郎

私は大平さんと四日三晩、IBMの天城ホームステッドに籠詰めとなり、電子計算組織の勉強会に参加したことがあった。それは朝八時半から夜の九時半まで室外に一步も出ることを許されない猛勉強だった。メンバーは、今は亡き安西正夫氏以下磯崎勲、大平正芳、倉田元治、広田精一郎、藤井丙午の諸氏と筆者の七名。時は昭和四十五年七月三十一日から八月三日までで、大平さんは当時、第二次佐藤内閣の通産大臣を辞して、しばらくの間の充電中であつた。七人の老書生達は勉強の甲斐あつて、それぞれ「Best Programmer in the World」なる記念楯をもらつて、得々と無事釈放されたのであつたが、そのコンピュータに対する理解力のほどはともかく、学窓を離れていずれも三、四十年。今は秘書に依存することのみ多い連中が、その日常を離れ一堂に会し、寝食をともしながら学生の昔にかえつて、未知の世界のなかで、お互いに研鑽に努めたということは、相互心情的にも接近させることにおいて極めて効果的であつた。

そのセミナーの仕上げに、破産しかけた製造会社の再建をテーマとしたシミュレーションがあつた。私と旭硝子社長の倉田氏と大平さんが、パートナーとなつたのであるが、大平さんは、率直に、「僕にはよくわからなから、二人でうまくやって下さい」といって、特別に自分の意見は出さず、産業と金融双方の意見をきいてうなずいてばかりいた。幸いにして会社は何とか配当が出せるまでになつたが、大平さんの冥想に耽つているような、目を半眼に開いたような顔付きが後々までも忘れられぬほど印象的だつた。これは小さな思い出に過ぎぬが、

その後大平さんが総理の印綬を帯びて際会した第二次石油危機に対してもった措置とダブらせて考えると、さらに印象は深いものがある。すなわち大平さんは原油価格高騰に伴う企業コスト転嫁を無理に抑えることなく、むしろ市場原理の調整にこれを委ねて、みごとに切り抜けたといえるのである。大平さんは官僚出身だが「民間主導型経済」を主唱した人であつた。そんな次第で、大平さんは総理になられてからも時として「あなたとは同級生だからなア」と冗談に呼びかけられた。そしてますます文字通り忙殺されるなかを、季節には「四国の『すだち』です」と几帳面な文字で書かれて忘れずに送つて下さり、こちらを恐縮させた。そんな大平さんでもあつた。

顔といえば、私は大平さんの顔はなかなかいい顔だと思ふ。大蔵大臣になられた時、「あなたの顔は東大寺戒壇院の多聞天に似ている、どうかこの像の如く泰然として国家の守護神となつて下さい」といつて、多聞天のような目を半眼にした顔を描いて差し上げたなら、「山高水清」と墨書した色紙を下さつた。誰かが「これは大蔵大臣ではない。環境庁長官みたいだ」といつたが、私はむしろ大平さんは政治経済の基礎に自然尊重の心を置かれたものと理解した。総理になられてから、即刻打ち出されたものに、田園都市構想なるものがあつたが、やはり発想の根拠はここにあつたものと思ふ。

大平さんの入院の報をきいたのは、たまたま訪欧中のロンドンの宿舎であつた。過労のための静養ということであつたが、その時、何だか嫌な予感がしたのを覚えている。といつのは日本を發つ直前の五月二十八日、二十九日と二晩つづけて大平総理をお見かけする機会をもつた。前夜は永野さんの豪州政府からの叙勲祝賀会であり、翌夜は華国鋒中国首相のお別れパーティーであつた。私はこの翌日、成田を發つたのであるが、きけばこの日、参院選公示で、第一声遊説後、不快を訴えられたといふ。それからわずか十二日にして忽然として逝かれた。思えば痛恨極りなき次第である。